評価し，従来の定説の修正を唱えた。これと時を同じくして，マクロフリン教授によってバッカスの伝記とその著作の選集が出版されたことは，アメリカ思想史の研究にとってよい刺激と言わねばならない。

（同志社大学文学部教授）

Language in America : A Report On Our Deteriorating Semantic Environment.

Edited by Neil Postman, Charles Weingartner & Terence P. Moran.
New York: Western Publishing Company, Inc., 1969.

石　黒　昭　博

生活環境の汚染が現代人の重要関心事となったのはつい最近のことであるが，汚染は目に見えない強い力とすさまじい速度で，人間のからだの健康のみならず心の健康まで侵している。それは人間の心が，ひいては人間の存在全体が，言語の汚染 (language pollution) によって根源的にゆすぶられているということである。

言語は人間が発明した最大のものであると言われるが，それの与えるものも大きい代り，それが人間から奪い去るものも多い。この give and take の相互作用は人間活動のあらゆる分野においてバランスを保たれているが，現代のように，言語を媒介としたマス・コミの発達した時代では，言語が人間から奪い去るものの方が，与えるものよりずっと多くなっている。こんな時代に最も根源的なものとして，しばしば問われる言語の問題を，人間の存在に関わりあるものとして，いろいろな現実的視野から眺めることがこの本の主題である。

冒頭にかかげられた Aldous Huxley のことばの中に提示された言語活動の諸面をとらえて，22の論文やレポートが，アメリカにおける言語のもたらす善悪をとりあげて論じている。1962年に Huxley が指摘したことは，8年後の今日には，急速に明白な現象として社会の各方面に現われている。

生存 (survival) はすべての生命体が必然的に追求するものであるが，本能的なものであれ，理知的なものであれ，この生存の追求をなすために，すべての生命体は考える。しかし，言語というシンボルを使って考えることのできるのは人間だけである。つまり，人間は生存をかけて，周囲の生活環境に抽象化を行ないつつ進化の道を歩み続けている。今日では，まさに編者の "Language is the key to human survival" (p. ix) "…language is man's unique instrument for survival" (p. ix) ということばで述べられている如く，人間の進む方向は言語にかかっていると言えよう。

本書はアメリカで今日使われている言語，現実を記号化するために用いられている言語，に対する検索を行なうという意図のもとに編まれたものであり，そのとりあげる項目は，政治，経済，法律，教育，出版，官僚機構，電子計算機など22項目に及び，それぞれの項目において，各著者は，はたしてそれらの世界で用いられている言語が人間の生存に真に貢献しているかどうかをチェックする。

22のすべての項目にわたって紹介することは紙面の都合で不可能であるので，評者の注意を引いたものに集中し紹介し，論評を加えたい。

Neil Postman は "Demeaning of Meaning" で，言語状況が極度に汚れていることをいくつかの例をあげて指摘する。例えば，政治家達は，記憶にまだ新しい連続的暗殺事件があったあと，その都度，「暴力は信じない」と言ったが，こんなことを公言し，それで自己の立場を表明してこと足れりとするような風潮を

著者は憂いている。こういうコミュニケイションの役に立たない言語を使うこと，及び，それを使うことを是認することが，現在，人間の直面した諸問題の解決を困難にしている元であると訴える。Postman のいう健康な言語状況というのは，"A healthy semantic environment is one in which language effectively serves the purpose of the particular context in which it is used."(pp. 15～16)であり，この criterion から見て，現在の状況は悲観的である。言語が人間のしていることについて，何故そうしなければならないのかを説明できない限り，その言語は汚れていると Postman は言う。彼は人間を導く立場にある3つのものをあげ，その中で使われる言語がいかに汚れているかを分析する。それらは，科学の言語，宗教の言語，そして政治の言語である。

科学の言語は，最も純粋にして，公正な情報を伝えるべきものなのに，1. 政治的イデオロギーの強調のため，2. 私的に，仲間内の隠語のように，3. 私的利益追求のため，4.（マス・コミの使用しているように）その用語の真の意味を理解せず野放図に，5. 言葉尻をとらえ，もの知り顔に科学的知識をひけらかし，真の意味を汚すように……用いられている。

宗教の言語は，宗教の本来の目的を逸脱した用途に用いられたら，その流す害悪は何より大きい。現在では，宗教世界が，1.sectarian(分派徒党的)，2.coersive(強圧的)，3. literal（字義に拘泥しすぎる)という問題をかかえているが，これらは大部分言語の問題から派生しているのだし，教会言語が以上3つの傾向を強くもっていることに因すると論ずる。

政治の言語は，民衆が政治家のことばを正札通り信じない習慣ができた時に汚れてしまう。これは，ひとり政治家だけの問題ではなく，政治から派生した職業についている者すべての責任でもある。例えば，記者，ニュース解説者などが自らの悪意と憎悪をそのことばにこめた場合，害悪は二重，三重に倍加される。その例として，人種偏見の反映が，テレビのニュース解説者の言行にみられると強く批判している。

Geoffrey Wagner は "The Language of Politics" で George Orwell の "In the case of a word like democracy, not only is there no agreed definition, but the attempt to make one is resisted from all sides"(p.22) ということばを引き，自由という語がいかに政治家によって都合よく利用されているかを述べている。著者によると，政治家はその背後で策動ができるなら，自ら努力して，その用いることばを極度の抽象体として提示する。具体的には，政治家の用いる用語は 1.まわりくどい語句（接尾辞）の過多，2.繋辞動詞の用いすぎ，3.能動態を避け受動態を好んで用いる……という傾向が強い。能動態は自己の責任をともなうので，当節の政治家はことさら避けるというのであり，ついでに Lincoln は Gettysburg Addressの中では passive は全く用いていないという興味ある事実を紹介している。(p. 23) 最近の大統領は，初歩の英作文のクラスの学生でも犯さない間違った用法でものを書き，統語法は誇大でも，意味は的をはずれているという。(p. 25) また，英語は本来 jargon を非常にうけ入れ易い言語であり，これはドイツ語がナチの特殊な用語をいとも容易にうけ入れ得たことと考え合わせ，注意を怠ってはならないことを訴える。また，現行の学校教育のカリキュラムでは，マクベスの英語と夕食に招かれたお礼の手紙の書き方の学習が同等に並んでいるとよく識者が非難するが，これはそれで良いのであって，現に，Shakespeare の台辞の variation はいたる所で見られている事実を指摘する。さらに，具体的には，政治用語には矛盾語法 (oxymoron) が復活し，clear bomb, safe accident などの例をあげている。学生層は今日では一種の power elite を作っているが，彼らは成人達の言語世界への挑戦の中に，彼らの政治的優越感を誇っているという観察は，学生運動を政治用語と power という面から観察していて面白い。現代はまた遠曲語法 (euphemism) の氾濫した時代で，労働者はすべて engineer とよばれ，garbage collector が sanitation engineer, bedding manufacturer が sleep engineer と呼ばれるナンセンスが横行していることに目を向ける。このような technical euphemism が過度に行なわれると，すべての実質が曖昧になり，耳には同じように聞こえるという現象がおこり，これこそ政治家の狙うところであり，このような状態を続けると，政治の用語は高度の抽象化を伴ったロボット言語になると警告している。

Pete Hamill の "The Language of New Politics" は急進主義を生み出した言語の罪悪を数えあげ，いわゆる自由主義者達，知識階級の偽善的発言，黒人問題に直言をことさら避けようとする傾向，権力側を攻撃することばの調子の高さのみに気をとられすぎている態度などに批判を浴せる。また，romantic revolutionaries をもてはやしすぎることによって，言語のもつべき真理研究を志向する力が損われることを指摘し，

これらが知識人の行動力の弱さをいたずらに暴露するものであると述べる。この論文は，言語という便利なからくりにかくれた偽似善を鋭く批判したもので，前出のいくつかの論文とは異なった保守主義的ニュアンスの強いことに注目しなければならない。

Henry A. Barnes の "The Language of Bureaucracy" は現在の官僚統治機構と言語の問題をその特殊な用語を中心に論じたものである。官僚達は解読が不可能に近いような用語を用いて文書を書き，一般人がこれに熟知するには，特殊な訓練が必要とされるほどである。 doubtless と言うところを unverified と言ったり， universally recognized principle と言うところを risky proposition と言う類である。このjargonの世界——と著者が呼んでいる(p. 50)——を解きあかすには，官僚社会の機構，機能，現状を詳細に分析することが必要であろう。もともと inside language は，そのグループの内におけるコミュニケイションの能率化の促進のために作られるものだが，今や，これは outsider を欺いたり，混乱させたりするためにのみ用いられているようである。(p. 50) 具体的用例としては， —ants のついた名詞の氾濫（例えば，pursuant, cognizant, conversant, resultant など）や，同意語の形容詞を無駄に羅列したり，わざと複雑な統語法を用いて，その中に単純な idea を埋没させてしまうことをあげている。この結果生まれる意味伝達の機能を備えない文章は，反比例的に増大した莫大な語数の単語の羅列に終ってしまう。この傾向はアメリカのみならず世界中で官僚制度が発達すると必然的におこる問題であり，これを防ぐための一般人の言語防禦の精神の普遍化が必要であろう。

James Lincoln Collier の "The Language of Censorship" は現代アメリカにおける出版物検閲の現状を論じたもので，その原則性のなさが追求される。著者はアメリカの現在の検閲制度が下層階級を対象としたもので，これは Victoria 時代の道徳観から一歩も出ていないと批判する。sex の問題に関しては，アメリカの民主主義は完全に失敗していると述べる。最高裁はわいせつ刊行物に対して「prurient interest を引き出すもの」という定義を与えるが，これは明らかに下層階級の読み物いわゆる cheesecake magazine を目当てにしたもので，実際はこれらの方が文学作品として検閲が手控えられている或るものよりずっと健全であると主張する。

Ossie Davis の "The Language of Racism" は英語が racism 騒動の元凶であるときめつける。英語には行動を規制する語が多すぎ，また，英語のもつ表現力が豊かすぎるという特徴が，英語国民（この場合特にアメリカ人）にその背後の意味を強く印象づけすぎるきらいがあると言う。例えば，white という形容詞には134の同意語があり，そのうち44が favorable なものであるに対し，negative なものは10にすぎず，他は neutral，また，black には120の同意語があり，なんとそのうち60が unfavorable なものであると言う。こんな背景のもとに，人種問題を用語の整理もなく論ずることは不見識のそしりを免れ得ないだろう。著者は黒人指導者が不用意にしばしば使う black powerということばは color power, Negro は Afro-American と改めるべきだとさえ言う。(p. 76) この論文は，次に紹介する Ashley Montagu の "The Language of Self Deception" とならんで，意味論的視野から分析を進めており，この論文集の中では異色のものである。

Montagu は "The world we perceive is the world we see through words…. It is through words that we are made human, and it is through words that we are dehumanized…. The meaning of a word is the action it produces…" (p. 82) ということばにみられる如く，この自己欺瞞という現代人の問題を言語心理学的に分析する。彼はいくつかの term（例えば "Human Nature", "Instinct", "Aggresiveness", "The Law of the Jungle" など）をとりあげ，その真の意味を追求し，いかに真の意味が曲解され，曲解が曲解を生んでいるかを論じている。最後に，言語を教える教育は文法としての言語ではなく，行動（behavior）としての言語を教えるべき使命をもつと主張しているが，これは現代における言語教育の方向を規定したものとして興味深い。

Ronald Gross の "The Language of Advertizing" は広告がますます誇大な表現で実質の伴わないことばの羅列化を進める限り，意味の虚脱現象を招き，ひいては言語の実質な死を招くことになると警告する。かつて Shelley が "Poets are the unacknowledged legislaters of the world" と詩人を評したのをうけて，S. I. Hayakawa が "advertizing copywriters are the sponsored poets of our time, the laureates of a consumer society" と広告文案家をほめあげたことと通ずる世間一般の広告を英雄視する風潮を激しく批判している。(p. 99) もっとも恐るべきことは，人間が概念の中に意味を陥没させてしまうことであ

り，広告の虚辞の氾濫は，この方向への言語の退却を速めていると警告する。(p. 102)

Terence P. Moran の "The Language of Education" はテレビ，ラジオのクイズ番組の問題の如き些事 (trivia) を重要視する傾向が教育界を毒していることを嘆じ，現在の教育に用いられている言語は，このクイズの言語と大同小異であると断言する。学力テストでは trivia が学生の能力判定に用いられ，評価は要領の良い trivia expert に好意的に行なわれ，独創的思考は罰点を与えられてしまう。これで真の教育が達成できるはずはなく，Dewey が "Education is what is left after the facts are forgotten." と言ったこととは逆に，最近の教育では，忘れ去られたら何も残さない facts のみが重視されていることを指摘する。大学の博士論文すらこの trivia の延長にすぎなくなり，大学の教師は，このような心を問題にしない技術のみを教える職人に堕し，making process より matching process を重視する結果，教育に一番大切な why を教えないことが横行している (p. 112) と論じ，教育の直面した問題を教育に使われる言語の面から実に興味深く観察している。

今世紀最大の発明と言われる電子計算機は今や現代人の生活に不可欠なものとして君臨しているが，Edward J. Lias の "The Language of Computer" は，この書の巻頭以来初めて，表題を肯定する立場で，この「沈黙の言語 (p. 157)」を強く支持する。Lias は，この発明は単に機械というようなものではなく，人間の一部であると述べ，現代生活に欠かせぬ要素たる精確性，即時性を与えてくれる電子計算機の all-at-once-ness を高く評価する。電子計算機はいずれ人間の思考と言語の無駄を省き，人間をより知的な，より能率的な存在にするだろうと予言する (p. 158) が，これは生成言語学者の言う人間が知性を修得するのは，複雑な言語体系のルールを修得する過程において培われるという説に反するもので，重大な危険性をはらんだ発言である。現代人は電子計算機に定着した生活を当然不可欠とするが，あくまで人間は電子計算機を使う立場にいなければならず，電子計算機の構造，機能に人間の能力を託し，言語の主体性まで放擲することは本末転倒であろう。

David Cort の論文 "The Voices of the Magazines" は雑誌の文章を文体論的に論じたものである。彼は *Time* の文体が多くの模倣を生み，悪文の手本みたいになったことを指摘し，現在の代表的雑誌の文体を批評するが，どれも cliché の氾濫と共に，焦点のないこと (pointlessness) が特徴で，いたずらに美辞麗句を，不可解な統語法で並べたものが横行していると述べる。もっともはなはだしい例は，婦人服飾雑誌にみられるという。著者の嘆きもさることながら，雑誌というものが本来，個定性の強い性格をもつものである以上，単に文体の問題として，こういう傾向の改善を訴えることは，やや的はずれのそしりは免れ得まい。

巻末の論文 Betsey B. Kaufman と Edward J. Lias の "Polluted Language" は，これまでの論文の問題点の総まとめという形で，言語の汚染という問題を総括している。汚染とは純粋なものに不純物が混じる状態で，汚染された環境の中では，生物体は生活ができなくなると同様に，言語の汚染は人間の社会生活の絆である汎人間的結びつきを妨げる(p. 233)ことを強く主張する。今までに述べられてきたような言語の汚染の状況下では，人間はいたずらに自らは高度な知的道具だと信じこんでいる言語を用いて，上べだけの言語の遊戯を，健全な思考活動と過信してしまっている。そうなると，健全な思考は死し，新たな生産は妨げられ，世代間の意志の疎通も止まり，新しい思想の発生も望めなくなる。こんな人間社会では革新 (innovation) も創造性 (creativity) も生まれ得ないと結ぶ。(p. 233)

この本は厳密な意味での言語学の本ではない。むしろ，広範な文明論というにふさわしい書である。それぞれの著者は言語の汚染の状態を歎き，その論調は，最後の論文に代表されるごとく，もの悲しい程 pessimistic である。しかし，これを額面通りうけとることは編者の意志をふみにじることになるだろう。編者の真意は，言語のこれ以上の汚染をくい止め，生存のために不可欠な清らかな状況を復活するためのアピールをなすことであり，読者の feedback を期待しているのだろう。これは，各論文のうしろに間奏曲の如くつけ加えられた資料のもつヒューマーをみればわかるだろう。

(同志社大学文学部助教授)